

就学前施設における動物介在教育に関する研究 — オーストリア・グラーツ市の事例より —

飯野 祐樹¹・大野 歩²・七木田 敦²

The Study about Animal Assisted Education in Early Childhood Facility — The example of Graz in Austria —

Yuki IINO¹, Ayumi OHNO², Atsushi NANAOKIDA²

Abstract: The purpose of this study is to verify about the animal assisted education at the institution of early childhood education in Austria Graz. The advanced nation which urbanization and the trend toward the nuclear family are accelerating, relation between people and an animal is being focused as a method of solving health, welfare and educational problem. While making such a situation into a background, HAB (Human Animal Bound) was shown as an international principle. Furthermore, concrete activity like AAA (Animal Assisted Activity), AAT (Animal Assisted Therapy) and AAE (Animal Assisted Education) has been widespread. Especially, Austria has achieved the advanced result about AAE. Then, this research focused on the practice which used AAE at the institution of early childhood education in Austria, and examined a philosophy and the situation of practice about it. The kindergarten which was applied by this research has carried out horse-riding and interaction with dogs as AAE. The purposes of AAE are therapy to the child with disability, and the support to the child who speaks other languages. Finally, it was shown that AAE of Austria gives implication in language education to early childhood education of our country.

Key Words: Early Childhood Education, AAE, Austria, Horse-Riding, Dog

I. はじめに

都市化や核家族化の進む先進国においては、健康や福祉、教育などの問題解決の一助として人と動物とのかかわりが注目されている。背景には、妊娠中、幼少時の子どもに哺乳類として受け継がれるスキンシップやかかわりの減少によって、社会性化の感受性期に豊かな感性を伸ばし切れない現状があるといわれている。このような状況から人と動物との絆（HAB=Human Animal Bound）が国際的な理念として提示され、動物介在活動（AAA=Animal Assisted Activity）、動物介在療法（AAT=Animal Assisted Therapy）、

動物介在教育（AAE=Animal Assisted Education）といった具体的な活用実践として拡がりを見せている（柴内，2009）。欧米では、AAAが医学的に認知されており、処方として、つまりは、保険対象となっている国もある。近年、AAAについては、青年や成人は元より、子どもを対象とした領域も形成されつつあり、様々な問題や課題を抱えた子どもへの治療や教育効果が実証されている（山崎，2009）。

AAEで介在される動物にはいくつか種類があり、その動物の特性に合わせて様々な介在方法が実践されている。なかでも、その独自の効果によって知られているのが馬を介在としたAAEである。馬は、犬やウサギ、ニワトリなどの小動物のようにある程度を子どもが自分で世話をするという介在方法と、背中に乗ると

1 弘前大学教育学部家政教育講座

2 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

いった小動物との身体的接触とは一線を画す運動的な介在効果を併せ持っている。このため、EFL (Equine - Facilitated Learning) という学習方法として確立されており、脳性まひ (Sterba et al., 2002) や、言語学習障害 (Macauley et al., 2004)、自閉症 (Bass et al., 2009)、などの問題を抱える子どもに対する有効性が示されている。

翻って、日本の子どもを対象としたAAEでは、学校や就学前の施設において、犬や猫、ウサギ、ニワトリなどの小動物を介在とし、飼育を通じたかかわりから責任感や集中力、共感性などを高めつつ、生命に対する関心を学ぶ「動物飼育活動」がよく聞かれる。ところが、乳幼児期からのAAEの有効性については、少しずつ明らかにされてきてはいるものの、その理念的な理解も含め、まだまだ一般的ではないうえに、研究蓄積も非常に少ないことが指摘されている (鎌田, 2002)。また、飼育以外での介在効果のある動物については、イルカによるAAE研究 (高岡ら, 2008) があるものの、他動物を介したAAEに関する先行研究はほとんど見受けられない。

AAAに関する先進的な研究成果が見られるのは、オーストリアである。中でも、首都にあるウィーン大学臨床心理学部は、AAA研究の世界的な拠点のひとつとして知られ、これまでに、子どもを対象としたAAE (Hergovich et al., 2002) や、EFL (Rockenbauer, 2010) の研究成果を有している。また、就学前施設でもAAEが積極的に導入されている。そこで、本研究では、オーストリア就学前施設でのAAEを用いた実践に焦点を当て、背景にある理念、及び、実践状況に対して検討を行うこととする。

II. 研究の方法

1. A幼稚園の概要

本研究では、オーストリア・グラーツ市 (シュタイアーマルク州) 郊外にあるA幼稚園を対象にAAEの検討を行った。A幼稚園には、3歳から就学前までの子どもが通園しており、AAEを積極的に行っているという点で特色がある。特に、乗馬療法については、牧場を幼稚園に併設しながら (写真1・2)、専門のスタッフが保育プログラムの一環として定期的に行っている。また、州の障害児支援法に従い、障害の有無に関わらず就学前の子どもの支援、及び、指導を展開しており、「共生・相互学習」の理念を掲げ保育を展開している。保育は、普通免許

を持った保育者をはじめ、特別支援の資格を持った保育者、セラピスト、心理学者、そして、医師との協同により行われている。障害をもつ子どもに対しては、理学療法、言語療法、作業療法、音楽療法、乗馬療法、犬介在療法等が提供されている。



写真1



写真2

保育者の話によれば、A幼稚園を利用する家庭の約4割は近隣諸国からの移民であり、これら家庭を背景に持つ子どもの言語獲得は、障害をもつ子どもの保育と共に、重点項目として考えられている。例えば、女兒Aは、タイから1カ月前にグラーツに移住してきた家庭の子どもであり、主要言語であるドイツ語の表出はほとんど皆無であった。筆者らがA幼稚園を訪問した期間、女兒Aには保育者が寄り添い、グループ活動への誘いや、生活の補助を行っている様子が見受けられた。さらに、A幼稚園では、他文化を背景に持つ子どもに対しても、保育施設への適応を目的に、AAEが用いられていることが述べられた。

以上のように、A幼稚園では、障害を持つ子どもや、他文化を背景に持つ子どもの支援を目的に、AAEが積極的に展開されており、この点に特色があると言える。そこで、本研究では、A幼稚園で実施されているAAEに焦点を当て、背景にある理念への検討、及び、実践状況の検証を行うこととする。

2. 方法

本研究では、下記の研究手法を基に、A幼稚園で実践されているAAEについて検討を行っ

た。第1に、A幼稚園でAAEがいかにかに用いられているのかについて、実践場面でのフィールド調査から検証を行う。第2に、保育者やインストラクターといったAAEに携わる関係者に対してインタビュー調査を実施した。調査は2011年6月に実施した。

Ⅲ. AAE に対する理念

A幼稚園では、理学療法の一環としてAAEを開始し、背景には障害を持つ子どもの負担軽減という目的が据えられていた。設立された当初、A幼稚園でのAAEは犬介在療法のみであったが(写真3)、数年の実践を経て、乗馬療法が導入される(写真4)こととなる。



写真3

写真4

A幼稚園でのAAEでは、日本の保育施設のように、水槽やケージで小動物を飼育するという方法は用いられていない。なぜなら、A幼稚園ではAAEを導入するに当たって、動物との共生を理念に掲げており、人間優位の姿勢が色濃く反映される飼育という営みは、この理念に沿わないためである。つまり、A幼稚園でのAAEは、動物と人間との対等性という考えが一義的にとらえられており、それは「交友(Companionship)」という言葉で保育者から表された。実際、筆者らがA幼稚園の子どもに、乗馬に関する質問を尋ねると、馬を「お友達(My Friend)」と語り、中には、お気に入りの馬に対して独自の名前を付けている子どもも見られた。また、他の保育者はAAEを、子どもたちが、自己理解、他者理解、さらには、世界との相互作用を学ぶ起点になると示し、自己形成において重要な機会になると認識していることが示唆された。

では、AAEに採用される馬にはどのような条件が求められるのか。A幼稚園では、AAEを担当するインストラクターが常勤しており、馬の世話をはじめ、AAEの実践を担っている(写真5)。



写真5

インストラクターによれば、AAEに採用される馬は、品種は関係無く、種牡馬や競走馬といった例外を除き、ほとんど用いることが可能である。ただ、AAEで用いられる馬に対しては一定の認定基準を満たすことが求められており、下記項目に対する評価を事前に受けることが課せられる。

〈AAEで用いられる馬の評価項目〉

1. 穏やかな気質を備えていること
2. 子どもとの共同学習が可能であること
3. AAEの最中、子どもに先導性を取らせることが可能であること
4. 急に前足を振り上げることや、後ろ足で蹴り上げないこと
5. 急に嘔み付かないこと

評価基準を満たした馬は、一定期間のトレーニングを受け、AAEに参加する。このように、A幼稚園でのAAEは、動物との共生を理念に掲げながら実施され、同時に安全面に対する配慮も最新の注意が払われていることが示された。

Ⅳ. AAE の実践状況

1. 他活動の導入

A幼稚園のAAEは、乗馬のみでなく、他の活動と組み合わせながら展開されている。中でも絵画活動は積極的に導入されており、例えば、写真6は馬舎を子どもたちが訪問した後、その時の様子を描いている場面である。



写真6

AAEの中で、馬の絵を描くことに対して保育者は、下記の2点で意義を認識していた。第1に、AAEでは写真やイメージとは異なり、実際に馬に触れる活動や、乗馬の活動を通して絵が描かれる。このことは、子どもたちのイメージの幅を上げ、中でも、馬の体温や心音、肌の感触、たてがみの柔らかさ、そして、馬舎の雰囲気を実際に感じることは効果的であることが語られた。第2に、他言語を母語に持つ子どもに対する意義である。先述したように、A幼稚園に通園する約4割の子どもは他言語を母語としている。中には、A幼稚園の主要言語であるドイツ語を全く話せない子どもも通園している。このような子どもに対してAAEは、自信(C Confidence)と自尊心(Self-Esteem)の育成に寄与するこが語られた。具体的には、馬舎を訪問した後に、他言語を母語に持つ子どもに紙を渡すと、ほとんどの子どもが馬の各部位を声に出しながら絵を描き始めることが述べられた。つまり、他言語を母語に持つ子どもにとってAAEは、自己表現をはじめ、社会的スキルの基礎形成という点で効果があることが示唆された。

作成された絵は、子どもたちから馬への贈り物(Gift)という形で馬舎に飾られる(写真7)。



写真7

また、AAEの活動では、絵画作成の他に、馬の誕生日や、引退する日等の記念日に、子ども側から感謝の気持ちを表すイベントが開催され、メダル等が馬に贈られる(写真8)。

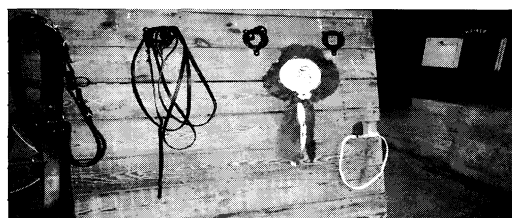


写真8

以上のように、A幼稚園のAAEは、乗馬活動に加え、他の活動を組み合わせながら展開さ

れていることが示された。AAEに組み合わされる活動のほとんどは、馬をA幼稚園の一員として、さらには、家族の一員として認識する機会となっており、この点に、動物との共生というA幼稚園の理念がうかがえる。

2. 乗馬活動を介したAAE

A幼稚園の乗馬活動は、6名程度の小グループで実施され、各グループが1週間に約30分程度の活動を行っている。乗馬は、室内外で行うことが可能であり(写真9・10)、具体的な活動としては、乗馬をはじめ、馬の餌やり、馬との触れ合い、そして、馬舎の見学等が実施される。



写真9

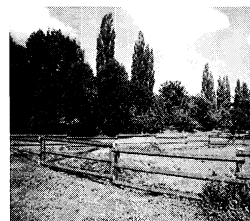


写真10

また、乗馬に至るまでの過程としてインストラクターは、下記3つの手順を提示した。

- 手順1
 - 恐怖心や不安感を取り除く
 - 馬の体に触れ、馬に慣れる
- 手順2
 - 静止した馬に乗る
 - 座ることに慣れる
- 手順3
 - インストラクターと乗馬を体験する
 - 馬の歩行速度を変える

これら3つの手順はインストラクターによって調整され、子どもに無理がないように進められる。乗馬活動を介したAAEの意義についてインストラクターは、レクリエーションとしての効果、子ども達の情緒の形成、生活力の向上、そして、教育活動における効果、の4点を挙げた。ここで示した4点の効用については、単に子どもと馬が触れ合うのみで生起するものではなく、インストラクターの適切な判断の下で展開することの必要性が語られた。

一方、障害を持った子どもに対するAAEの意義についても述べられた。これまで、A幼稚園の乗馬活動を介したAAEは、脳性麻痺、小児麻痺、視覚・聴覚障害、二分脊椎、等の障害

を持った子どもに対して実施されてきた。具体的な効果としてインストラクターは、筋肉の緊張の緩和、筋力の強化、バランス感覚の獲得、集中力の向上、自信の獲得、等が挙げられた。これら効果に対する、乗馬活動の意義としては、個々のニーズに合わせて活動を展開できることが示され、例えば、子どもが抱える障害の種類に応じて、馬の歩幅や、歩く速度を適宜調整していることが述べられた。

このように、A幼稚園の乗馬活動を介したAAEは、すべての子どもを対象に実践されており、インストラクターも一定の効果を認識していることが示された。しかしながら、乗馬活動に適した馬を育てるためには、高額な経費が必要となり、費用面での課題が述べられた。さらに、A幼稚園では馬の世話をはじめ、すべての乗馬活動を1人のインストラクターが担っているという現状にあり、インストラクターの育成という課題も残されていることが示された。

3. 犬を介したAAE

A幼稚園では、犬を介したAAEも実践されている。AAEで用いられる犬は、日中をA幼稚園で過ごし、開園時間後は保育者の家庭で世話を受けている。犬は施設内を自由に動きまわることができ、子どもたちとの交流機会を持っている。AAEで用いる犬の選定では、馬のように特別な評価を受けることは無い。選定は保育者の判断に委ねられ、気性が穏やかで子どもに先導性を取らせることが可能であること、子どもたちに安心感や温もりを与えられること、等が見られる。

犬を介したAAEの効果について保育者は、ドイツ語や英語を話すことができない子どもに対する意義を認識していた。具体的には、ノンバーバルなコミュニケーションが生起する点での効果が語られ、保育者や他の子どもに中々心を開かない子どもでも、犬との交流には積極性が見られる場面が多くあることが述べられた。中には、犬と会うために幼稚園に来るという子どもも見られ、A幼稚園に犬がいることで、子どもたちに安心感を与えていることが示唆された。さらに、AAEに犬を用いることで、攻撃的な子どもが穏やかになるといった変容も見られることが保育者から語られた。このように犬を介したAAEは、子どもたちの不安やストレスを取り除くことで、安心感を与えると共に、他言語を背景に持つ子どもにとっては、A幼稚園への適応という点で重要な役割を果たしてい

ることが示された。

他方、犬を介したAAEの効果として、生命の誕生に出会えることが挙げられた。馬に比べ犬の出産サイクルは短く、子どもたちは赤ちゃんの誕生を間近で感じる事が可能である。このことは、生命の大切さは元より、子どもたちの出生の背景を伝えるに当たって有効な方法であると保育者は認識していた。一方、犬の死にも子どもたちは向き合うこととなり、生命の尊厳や死の悲しみ等を伝える機会も設けられていた。

以上のように、犬を介したAAEでは馬とは異なり、子どもたちの交流の機会が増えることで、親近感が増すことが示された。中でも、他言語を母語に持つ子どもに対してノンバーバルのコミュニケーションの効果が期待されており、この点は、移民の流入が激しいオーストリアの国情を反映していると言えるだろう。また、生命の大切さを伝えるという点でも、誕生から死という一連の過程がありのままに伝えることが重視されていた。一方、開園時間外での犬の世話や、新たに誕生した子犬の世話という点で課題が示された。

V. まとめ

以上では、A幼稚園におけるAAEの実践事例を検討してきた。ここで注目すべきは、様々な理由で言語に難しさを感じる子どもたちが、言語を持たない動物との触れ合いを通じて、自分と周囲の世界との関係性を理解していく過程である。

人間が動物と異なる大きな点に、言語という文化ツールを有することが挙げられる。このことから、西洋では、文化は自然に優越するため、文化的存在である人間が自然に属する動物を支配するという構図が描かれがちである。ところが、トーテミズムやアニミズムを背景に持つ文化では、人間は自然の一部であるという世界観を背景に、人間と動物との間に対等性が形成され、ときには人間よりも自然の方が優位であるとされる(Willis, 1974)。このような社会では、共生や共存という言葉では表現しきれないような、人間と動物の親密な関係性によって世界が構築されており、日々自然との交渉をしながら生活が営まれている(Levi-Strauss, 1962)。

菅原(2010)は身体的な接触による「相互疎通=心が通い合う」や「交話=ことばによる交感」といった「共有コードに従った情報の伝達」以外の「コミュニケーション」を説明した。こ

こから、言語を用いたやりとりが、必ずしも人間が存在する世界の中心にあるわけではなく、むしろ、言語を介さない関係性の構築により、人間社会が形成されていることを示している。

A 幼稚園の子どもたちが描いて馬舎に飾られた作品は、あたかもアルタミラやラスコーの洞窟壁画のような趣を漂わせている。これは、子どもたちが、既存の西洋文化の価値観を越えた世界の在り方を、おのずと理解していることを含意するだろう。昨今、言語の習得を就学前の活動にどのように取り入れるかという議論がなされているが、AAEはこのような議論が前提としている人間の発達や社会の在り方を読み直す手立てとしても、有効な実践になりうるのではないだろうか。

引用・参考文献

- Bass, M. M., Duchowny, C. A., Lilabre, M. M. (2009) The effect of therapeutic horseback riding on social functioning in children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, Vol.39, No.9, pp.1261-1267.
- Hergovich, A., Monshi, B., Semmler, G. & Ziegler, V. (2002) The effects of the presence of a dog in the classroom. *Anthrozoös*, 15(1), pp.37-50.
- 鎌田文聰 (2002) 乳幼児と動物飼育活動. 岩手大学教育学部研究年報, 第62巻, pp.127-141.
- Levi-Strauss, C. (1962) *La Pensée sauvage*. 大橋保夫訳 (1976) 野生の思考. みすず書房.
- Macauley, B. L. & Guttierrez, K. M. (2004) The effectiveness of hippotherapy for children with language-learning disabilities. *Communication Disorders Quarterly*, Vol.25, No.4, pp.205-217.
- Rockenbauer, S. (2010) *Tieregestützte Therapie mit Pferden bei Patienten mit emotionaler Instabilität*. Diplomarbeit, Universität Wien.
- 柴内裕子 (2009) 動物介在療法—日本の現状 人の心にも体にも大切な動物との関わり (相互作用)—. *小児科臨床*, Vol.62, No.4, pp.581-590.
- Sterba, J. A., Rogers, B. T., France, A. P. & Vokes, D. A. (2002) Horseback riding in children with cerebral palsy: effect on gross motor function. *Developmental Medicine & Child Neurology*, Vol.44, Issue5, pp.301-308.
- 菅原和孝 (2010) ことばと身体「言語の手前」の人類学. 講談社.
- 高岡忍・漆原宏次・石田雅人 (2008) イルカ介在活動の効果に関する考察—ある自閉症児の事例から—. *大阪教育大学紀要 第IV部門*, 第56巻, 第2号, pp.29-42.
- 山崎恵子 (2009) 動物介在療法—諸外国での現状—. *小児科臨床*, Vol.62, No.4, pp.591-595.
- Willis, R. G. (1974) *Man and Beast*, Hart-Davis MacGibbon. 小松和彦訳 (1979) 人間と動物—構造人類学的考察—. 紀伊國屋書店.

謝 辞

オーストリアでの実地調査の際にはグラーツ医科大学 (Medical University Graz, Austria) の Elfriede Greimel 先生に施設訪問のコーディネートを始め、研究に関する貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。